

倭人は、帯方郡（朝鮮半島）の東南の大海の中にあり、山や島により国やまちをつくつてゐる。もとは百余りの国からなつていて、漢の時代に朝見してきた国もあつた。いま使者や通訳が通つてくるところは三十国である。

帯方郡から倭に行くには、海岸に沿つて航行し、韓の国を経て、しばらく南にしばらく東にすすんで、その北岸の狗邪韓国に到着する。この間は約七千里である。そこからはじめて一つの海を渡り、千余里にして对馬国に到着する。その大官はヒコ（卑狗）といい、副をヒナモリ（卑奴母離）という。住んでいるところは四面を海でかこまれた孤島で、広さは方四百余里ばかりである。土地は山が険しく、深林が多く、道路は獣道のようにである。千余戸がある。良田が無く、海産物を食糧として自活し、船によつて南北から米穀を買い入れている。また一つの海を渡り、千余里すすむ。この海の名は瀚海といい、一支国（吉岐）に到着する。官はまたヒコといい、副はヒナモリという。広さは方三百里ほどで、竹木や叢林が多く、三千ばかりの家がある。田地は少々あるが、田を耕すだけでは食するに足らないので、南北から米穀を買い入れている。

また一海を渡り、千余里行くとマツロ（末盧）国（松浦か）に到着する。人家は四千余戸あり、人々は山すそや海浜に沿つて住んでいる。草木が茂盛していて、道をすすんで行つても、前に行く人の姿を見ることができない。この国の人々は魚やあわびを捕えるのが得意で、水の深浅を問わず水に潜つてそれらを捕えている。陸を東南に五百里すすみ、伊都国（糸島か）に到着する。官はニキ（爾支）といい、副をシマコ・ヒココという。人家は千余戸ある。この国には代々国王がいて、みな女王国に統属している。ここは帯方郡からの使者が倭国と往来する時には、常に駐まるところである。東南に百里すすんで奴国（那の津、博多）に到着する。官はシマコといい、副はヒタモリという。二万余戸あり。東に百里すすんでフビ（不弥）国（宇美か）

に到着する。官をタマ(多模)といい、副はヒナモリという。千余家である。

南へ水行二十日にして投馬国(以下の国名は不詳)に到着する。官はミミ(弥弥)、副はミミナリ(弥弥那利)という。五万余戸の人家がある。南に進んで邪馬台国に達する。ここは女王の都しているところで、水行十日と陸行一月の日数がかかる。官にイキマ(伊支馬)があり、次を弥馬升、次を弥馬獲支、次を奴佳テイといい、七万余戸の人家がある。女王国より北にある国々については、その戸数やそこに行く道里をだいたい記載できるが、その他の旁国は遠絶であるため、戸数や道里の詳細を知ることができない。

つぎに斯馬国があり、つぎに己百支国、つぎに伊邪国、つぎに支国、つぎに弥奴国、つぎに好古都国、つぎに不呼国、つぎに姐奴国、つぎに対蘇国、つぎに蘇奴国、つぎに呼邑国、つぎに華奴蘇奴国、つぎに鬼国、つぎに為吾国、つぎに鬼奴国、つぎに邪馬国、つぎに躬臣国、つぎに巴利国、つぎに支惟国、つぎに烏好国、つぎに奴国などの国々がある。ここまでで女王の支配している領域が終わる。

その南には狗奴国(熊襲か)があり、男子が王となっていて、官には狗古智卑狗(菊池か)がある。この国は女王に服属していない。ところで、帯方郡より女王国に至る間の距離は一万二千余里になる。

倭の男子は大人。子供の別なく、みな顔面と身体にいれずみをしている。古くから、倭の使者は中国で皆自分から大夫と称している。その昔、夏后少康の子が会稽に封ぜられた時、断髪文身して鮫竜の害をさけ身体を守った。倭の水人(あま)は水中にもぐって魚や蛤を捕える。彼らがいれずみをしているのは、魚や水鳥にたいするまじないであるが、今では飾りともなっていて、諸国それぞれにいれずみ

のしかたも異なり、あるいは左に、あるいは右に、あるいは大きく、あるいは小さくしたりし、また尊卑の身分によっていれずみに違いがある。

帯方郡からの道里を計算してみると、倭はちょうど会稽の東冶の東方海上にあることになる。

倭人の風俗は乱れてはいず、男子はみな髪の毛を露出し、木綿を頭を巻いている。衣服は横広の布で、ただ結び束ねているだけで、ほとんど縫っていない。婦人は総髪をさげてまげの部分を折り曲げており、衣服は単衣のように作り、衣の中央に穴をあけて、そこに頭を通して着ている。一人々は稲や貯麻を植え、桑を栽培し蚕を飼つて糸をつむぎ、麻糸・きぬ・綿を産出する。倭の国々には牛・馬・虎・豹・羊・鵠などはいない。兵器は矛・楯・木弓を使用し、その木弓は下部が短く、上部が長くなっている。やじりには鉄あるいは骨を用いる。その土産物の有無の状況は、タン耳や朱崖（ともに海南島）の土産と同じである。

倭の地は温暖であるため、冬でも夏でも生野菜を食べ、皆はだして生活している。また家屋を建築している。そして父・母・兄・弟らは、それぞれに寢所を別々にしている。彼らは朱や丹を身体に塗っており、中国で白粉を用いるのと同じである。飲食には竹木製の高杯を用いているが、手食する。人が死ぬと、埋葬するため遺体を棺に納めみが、墓には棺を納める槨がなく、棺の上に盛り土をする。人が死ぬと、はじめ十余日間ほど喪に服する。この間、人は肉食をせず、また喪主は哭泣し、他の人々は喪主の側らで歌舞し飲食する。埋葬しおわると、喪主の一家は水中に入り澡浴する。それは中国における練沐のようである。

倭人たちが海を渡って中国に。やって来るときには、つねに一人の

人物が頭髪を梳かず、しらみもとらず、衣服は垢に汚れたままにし、また肉食もせず婦人をも近づけず、すなわち彼をあたかも死者の喪に服している人のようにさせる。これを持衰（じさい）といっている。もし、航海が吉善であつたならば、人々は彼に生口（奴隸）や財物を与える。しかし、旅行者の中に病人が出たり、暴風雨の被害に遭つた時には、その持衰と呼ばれる者を殺そうとする。そうした凶事が起るのは持衰が禁忌を守らなかつたからである、といつのである。

真珠や青玉を産出する。山からは丹を産出する。木には、くす・とち・くぬぎ・すぎ・かし・くわ・かえで、などがあり、竹類には、しの・やたけ・かづら、などがある。しょうが・橘（たちばな）・さんしょう・みょうが、もあるが、滋味ある食物として利用することを知らない。さるやくろきじ、もいる。

習俗としては、行事を行なうとか、旅行に出るとか、また何かしよつとする時には、骨を灼いてトイ、吉凶を占う。最初に占うことを告げるのであるが、そのト兆の解釈は中国の亀卜の法に似ており、火のさけめを見て、その吉凶の兆を占う。

集会での座席や起居の順序には父子や男女の区別はない。人かは性来酒を好む。身分の高い人が尊敬される作法を見ると、ただ手を打つだけで、中国の跪拜の代わりとする。寿命はあるいは百年、あるいは八、九十年の長寿である。彼らの習俗では、身分の高い人は皆四、五人の妻を持ち、身分の低い者でも二三人の妻を持っている。婦人は淫らでなく、嫉妬もしない。泥棒もいないし、訴訟も少ない。法を犯した場合、軽い者ではその妻子を取り上げ、重い者ではその者の家族および一族を殺す。尊卑の間には、それぞれの身分の差異があつて、上下臣服の秩序が充分に立っている。人々に租・賦を納めさせ、これらを収納するための倉庫がある。国々には市場があつて、

人々は有無を交換しあっているが、大倭に命じてその市場を監督させている。

女王国は北にある国々に対し、特別に士卒を置き、諸国を檢察させている。国々はこの士卒を畏れ憚っている。士卒は常に伊都国に置かれていて、国々の内におけるその権勢は中国の刺史のようである。女王が使者を派遣して、洛陽や帯方郡または諸韓国に行かせる時や、帯方郡の使者が倭の国に使いする際にも、それらの使者は港で文書や賜物の点検確認をうけ、女王のもとに行つた際に、文書や品物に間違いの起らないようにする。

身分の低い者が高い者と道で逢つた場合には、あとずさりして道端の草むらに入る。言葉をつたえたり、物事を説明する際には、うづくまつたり、あるいはひざまずいて、両手を地面につける。これは下の者が上の者に対して恭敬の意をあらわす作法である。受け応えの声を「あい」というが、わが国の言葉とくらべてみると、承諾の意味のようである。

その国は、もと男子が王であつた。ところが男王の治下、七、八十年以前のこと、倭国は大変に乱れて、国々は互いに攻撃し合つて年が過ぎた。そこで、国々が協同して一人の女子を立てて王としたのである。彼女は名をヒミコ（卑弥呼）といい、鬼道に仕え、その靈力でうまく人心を眩惑している。歳はすでにかかりの年齢であるが夫を持たず、男弟がいて彼女の政治を助けている。彼女が王となつてからは、彼女を見た者は少なく、婢千人を侍らせている。ただ一人の男子だけが飲食を給仕するとともに、神託をうけるために彼女のもとに出入りする。彼女の居処の宮室は楼観（みはりやぐら）や城柵を厳しく設け、また常に兵器を持った人々がいて守衛している。

女王国の東、海を渡ること千余里の彼方に、また国がある。いずれ

も倭種の国である。また、その南に、侏儒国がある。人の身長は三四尺にすぎない。この国は女王国から四千余里も離れている。また裸国・黒齒国があり、侏儒国の東南に在って、船で一年もかかって到着する。倭の地に出かけてみると、遠く離れた海中の洲島に在り、あるいは海で隔てられ、あるいは陸続きになっていて、島々を巡って行くと、五千余里ほどにもなる。

景初二年(238)六月、倭の女王は大夫難升米(田道間守か)らを遣わした。難升米らはまず帯方郡に詣つて、天子に拝謁し朝献したいと希望した。郡太守の劉夏は役人を派遣し、難升米らを引率して魏の帝都に送らしめた。

その年の十二月、齊王は詔書を発し、倭の女王につたえるため、次のように言った。「汝を親魏倭王卑弥呼に任命する。帯方郡太守劉夏が使者をつかわし、汝の大夫難外米と次使都市牛利を送り、汝の献じた男の奴隷四人、女の奴隷六人と班布二匹二丈を奉じて、わがもとに到着した。汝の国は、はるか遠くにあるにもかかわらず、こうして使者を遣わし貢献してきたのは、汝の忠孝のあらわれであろう。そこで私は汝を大変慈しみ、いま汝を親魏倭王とし金印と紫綬を与えようと思う。装封して帯方郡太守に托し汝に授ける。汝は倭人を綏撫し、つとめて我に孝順をつくすようにせよ。汝の遣わした使者難升米・年利らは遠路を苦勞してここまでやって来た。その功を認め、いま難升米を率書中郎将、年利を率善校尉とし、銀印青綬を与え、彼らを引見し、ねぎらつて送りがえすであろう。また、あか地交龍錦五匹、うすぎぬけわり十張、あかね五十四匹、紺青五十四匹を与える、これらは汝が献上した贈物の価値に相当するものである。また特に汝には紺地句文錦三匹、細班華ケイ五張、白絹五十四匹、金八両、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠鉛丹各五十斤を与えよう。これらの品物はすべて装封して難升米と年利に託したから、彼らが国に帰ったならば、記録して受け取るように。たおこれらのすべてを汝

の国の人々に示し、魏の国が汝を愛することを知らさなければいけない。故に鄭重によい品物を与える」と。

正始元年(250)、太守弓遵は建中校尉梯儁らをつかわし、詔書・印綬をもたせて倭国におくった。使節は倭国に至り、倭王に謁して斉王の詔書、黄金ときぬ・刀・鏡・采物を贈与した。そこで倭王は使者に託して表文をたてまつり、斉王の詔と恩恵に答謝したのであった。

その四年のこと、倭王は再び太夫伊声書・掖邪狗ら八人の使節を送り、奴隸・倭錦・紺青の綴・綿衣・帛布・丹・木附(ゆはず)・短弓矢を献上してきた。掖邪狗ら八人はみな率善中郎將の位と印綬を与えられた。

その六年には、斉王は詔して、倭の難升米に黄檀の官位を与えることにし、帯方郡に託して授けた。

その八年、帯方郡の太守王キが新たに任官した。倭の女王卑弥呼は、もとから狗奴国の男王卑弥弓呼(彦尊か)と不和であったので、倭の載斯烏越らを帯方郡に送り、狗奴国と攻撃しあっている様子を報告した。そこで太守は塞曹掾史張政等を遣わし、彼らにさきの詔書と黄鐘を託しておくり、難升米に授け、激文をもって卑弥呼に告諭した。

女王卑弥呼が死んだ時、倭人は大きな塚を作った。それは直径百余歩ほどもあり、その際殉葬された者は奴裨百余人であった。ついで、男王を立てたが、国中が服従せず、その上お互いに殺し合った。この時千余人が殺されたという。そこで再び卑弥呼の宗女の婁与という十三歳の女の子を立てて王としたところ、国中はやっと治まった。

張政らは激文を發し、婁与に告諭を与えた。それにこたえて婁与は、

倭の大夫率善中郎將掖邪狗ら二十人を派遣し、張政等が帰国するの
を送らせた。ついで掖邪狗らは洛陽に行き、男女の奴隸三十人を献
上し、白球を五千孔、青く大きいまがたま二枚、あやの異なる雑錦
二十匹を貢した。